

社会科学部学生論文集の発刊に寄せて

社会科学総合学術院長 西原 博史

ここに、2015年度社会科学部学生論文集をお届けする。

インターネットの発達により、20世紀のマスメディア環境を特徴づけていた話者と聴き手の分離は克服されつつある。しかし、そうした状況だからこそ、印刷メディア、その中でも大学紀要が属する学術雑誌は、厳密な編集プロセスを経ることによって、それぞれ最先端の地平において信頼できる標準的準拠枠を作成する機能を担う。その機能を前にして、学部学生の「論文」に紙面を割り、受容機関に届けてよいのかは、当然、慎重な考慮に値する問題だった。

いかに早稲田大学の教育において知的創造に価値が置かれていようとも、学部学生が成し得ることには一定の限界がある。特に、日本の社会科学が海外で発表される最先端の研究成果を踏まえながら展開していることを考えると、特定の比較対象国の一次文献に対する比較的長期にわたった網羅的フォローができていない時、そこで成り立つものが研究成果という名に値することは、疑問なしとしない。

それでも我々は、今年度も学生論文集を——それも胸を張って——皆様のお手元にお届けする。仮に海外文献に関わる網羅的渉猟に不十分なものがあつたとしても、適切に絞り込まれた課題設定と厳密な手順を踏まえた考察手続により、アイデアが検証に耐え得る形で提示可能であると考えたからであり、また、本誌収録論文を始めとする学生たちによる知的創造に触れる喜びを知っているからである。

早稲田大学は、学生にとっての教員の権威が世界中で最も低い大学ではないかと感じることもある（自分自身、その学生として育ってきたので文句は言えない）が、それは、学生を含めて学問共同体の構成員全員が先を見つめて現状を乗り越えようとする、進取の精神を共有するところに成り立つ。したがって、各論文に指導

を行った専任教員名が書かれているが、これは、内容面で影響を及ぼした者を特定する機能を果たすものではない。粗削りな中で表出される新鮮な視点は、執筆した学生たちに由来するものであり、だからこそ、大きな起爆力を秘めている。

それでも、先人に対する最低限の敬意を表現できるよう、必要な文献収集と参照文献の正確な注記に関する指導の責任を教員が引き受けられる程度には、知的誠実さに基づく関係が築かれているはずである。もし、先行研究の調査等において不備があれば、それは学生ではなく、指導した我々教員の側の責めに帰すべきことである。

稚拙な表現力による多少の無礼な物言いに関しては宥恕を乞いつつ、万が一、先行研究の扱い等に至らぬ部分があった時には我々教員への厳しい叱責をお願いしたい。内容に関しては、正面からの批判の対象としてもらえれば極めて幸甚なことである。味わってもらうべき輝きが伝わることを、心より祈りたく思う。